公立高等学校における特別活動の実践に関する一考察
―学校行事に焦点を当てて―

西澤 頼孝*　原北 祥悟**

A Study on the Practice of Extraclass Activities in Senior High School
―Focus on School Events―

by
Yoritaka NISHIZAWA * , Shogo HARAKITA **

要　旨

本稿は、高等学校における特別活動が担う教育的意義について、熊本県立玉名高等学校を事例にして検討を行った。先行研究でも指摘されている通り、高校における特別活動の重要性は教科等と比べて相対的に劣位に置かれがちである。しかし、だからといって特別活動を軽視して良いわけではない。教育の目的が人格の完成にあることを踏まえれば、教科等の知識や技能とともに人格形成に欠かせない他者との協働や合意形成、人間関係形成、自己実現の経験は特別活動を核にして取り組む必要がある。

熊本県立玉名高等学校体育祭を事例に分析すれば、人間関係形成や社会参画といった特別活動が目指している資質・能力は学校が持つ歴史や伝統に強く支えられていた。特別活動をより充実したものへと昇華していくためには、歴史・伝統等の環境的な側面も重要な役割を担うが、やはり教職員一人一人が特別活動の意義を再確認し、各種教育活動に反映させていこうとする態度が求められるだろう。

Key Words：特別活動、人間関係形成、自己実現、社会参画、教育実践

はじめに

高等学校の教育活動の中において、「体育祭」や「文化祭」といった特別活動の「学校行事」は、どれだけの教育的意義を持っているだろうか。筆者の肌感覚ではあるが、小・中学校に比べて高等学校の現場においては、その教育的価値や教育効果について、教科・科目の学習ほどには意識されていないように思われる。しかし、伝統のある、いわゆる名門校と呼ばれる高等学校が、特色ある学校行事を持っていることはよく知られている。同窓会などでも共通の思い出として語り合われることも多く、その体験は自らの人生の大いなる財産となっていると感じる者も少なくないだろう。

熊本県内の高等学校でも様々な「体育的行事」や「文化的行事」等が行われているが、熊本県北部の進学拠点校である熊本県立玉名高等学校の「体育祭」と「文化祭」を中心とした特別活動が、生徒にどのような人間的成長を促してきたのか、また、昭和から平成、令和と時代が移り変わる中で、「体育祭」や「文化祭」がどのように変化していったのか、同校に昭和

＊崇城大学総合教育センター講師
＊＊崇城大学総合教育センター助教

60年から初任として勤め、40代の二度目の勤務で学年主任や教務主任を体験し、退職前に校長として三度目の勤務をした筆者（西澤）の経験を交えながら、特別活動の「学校行事」が持つ教育的意義について考えていきたい。

（西澤頼孝）

1．特別活動について

①　学習指導要領の改訂

平成28年12月21日の中央教育審議会（以下、中教審）答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の第1部「学習指導要領等改訂の基本的な方向性」・第2章「2030年の社会と子供たちの未来」にあるように、今回の学習指導要領改訂では、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であるとされ、また、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要であるとされている。

そして、今回の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標や内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理されている。

高等学校においても平成30年3月30日、高等学校学習指導要領が公示され、学校教育法施行規則の関係規定が改正された。そして、令和4年4月1日以降に高等学校の第1学年に入学した生徒（単位制による課程にあっては、同日以降入学した生徒〈学校教育法施行規則第91条の規定により入学した生徒で同日前に入学した生徒に係る教育課程により履修するものを除く。〉）から年次進行で段階的に適用されている。

特別活動が「ホームルーム活動」、「生徒会活動」、「学校行事」から構成されるという大枠の構成に変化はないが、今回の改訂においては、特別活動において育成することを目指す資質・能力について、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて目標及び内容が整理された。

②　特別活動の目標

特別活動の目標については、学習指導要領第5章第1「目標」で次のとおり示している。「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

(2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。(3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」

その中で「知識及び技能」にあたる「(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。」の活動として具体的に挙げられているのが、「集団で活動する上での様々な困難を乗り越えるためには何が必要になるのかを理解すること。集団でなくては成し遂げられないことや集団で行うからこそ得られる達成感があることを理解することなど、集団と個との関係について理解すること。また、集団活動の意義が社会の中で果たし

ている役割や意義、人間としての在り方や生き方との関連で集団活動の価値を理解すること。」である。

（西澤頼孝）

2．高等学校における特別活動の実践

高等学校における特別活動は、小・中学校のそれと比べて必ずしも重視されていない傾向にあることは既に多くの先行研究において指摘されているところである（例えば熊谷 2020）。そのため、高等学校においていかなる教育実践が展開されているのか、十分に把握することができない。そこで以下では、広島県立高等学校での特別活動の取組事例を取り上げ、その特徴の一端を確認したい。

広島県教育委員会は「令和元年度心を耕す積極的な生徒指導を推進する特別活動の取組事例【高等学校】」としてその実践事例を HP 内に掲載している。ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の項目が立てられており、全 8 校の実践が公開されている。

まず広島県立沼南高等学校の学校行事「第 16 回沼南高等学校体育祭」の事例に焦点を当てる。この体育祭で育てたい資質・能力は、社会参画 :「自分の役割に責任を持つ」、人間関係形成 :「お互いを認め合う」、自己実現 :「自己肯定感」が示されている。具体的な取組内容として、各学年・クラスで出場種目のメンバーを決める際、生徒同士で調整させる場を設けたり、予行練習・本番当日の運営はできるだけ生徒に任せたりすることで「自分の役割に責任を持つ」ことの意義や難しさを意図的に経験させていることが窺える。また、行進練習でリズムを揃えるために、お互いの掛け声が大切であることに気付かせることで「お互いを認め合う」機会を設けている。

次に広島県立福山商業高等学校に焦点を当てる。ここでの体育祭では、人間関係形成 :「協調性」、自己実現 :「思考力・判断力・表現力」、社会参画 :「自主的、実践的な態度」を育てたい資質・能力として位置づけている。これら資質・能力を育むために、体育の授業において、4 月当初から集団行動等の練習を通して、グループ活動の時間を多く取ることで、グループ内の協力関係を築かせる取組を実施している。また、クラス単位の応援について、生徒会執行部が作成した原案をもとに「応援のルール」を決定しており、その決定プロセスは確認できないものの民主的な手続きの上、ルールを守ることを通じた社会参画が意図されている。

試行錯誤を繰り返しながらより良い（教育的意義を高める）体育祭が模索されていると言える。高校魅力化の政策的文脈も相まって、今日の高等学校は多様である。その高校の歴史・伝統・地域性、生徒の実態等々を踏まえた特別活動の構想・実施が求められていると言えよう。

以下で取り上げる熊本県立玉名高等学校はいわゆる「伝統校」に位置づく。伝統校ならではの取組が根付いているが、それがどう子どもたちの人間関係形成や自己実現に結びついているのか検討したい。

（原北祥悟）

3．熊本県立玉名高等学校の事例

①　学校の沿革

今回訪問した熊本県立玉名高等学校（以下「玉名高校」と表記）は、高校全日制 760 名、高校定時制 38 名、附属中学校 221 名からなる（令和 5 年度現在）、熊本県北部の玉名市にある県立の中高一貫教育校である。

学校の沿革は、明治 36 年に開校した熊本県立熊本中学校玉名分校（明治 39 年に熊本県立玉名中学校として独立）と、明治 45 年に開校した熊本県玉名郡立実科高等女学校（大正 12 年に熊本県立高瀬高等女学校と改称）を前身に、昭和 23 年の学制改革により熊本県立玉名高等学校となっている。平成 23 年には玉名高等学校附属中学校を併設し、令和 5 年度に創立 120 年を迎える伝統校である。卒業生数は 4 万人を超え、日本人初のオリンピック選手としてストックホルム大会に出場した金栗四三氏や、映画「男はつらいよ」シリーズに出演した笠智衆氏などが有名である。

②　教育目標

学校の教育目標は、校訓「至誠・剛健・進取」のもと、高い志とチャレンジ精神をもって、仲間とともに切磋琢磨しながら、持続可能な開発目標（SDGs）に貢献し、日本や世界の様々な分野で活躍できるグローバル人材や地域社会の発展をけん引できるリーダーの育成である。そのため、中高一貫の学びと高校入学からの学びを両軸として、系統的な学びや進路希望に応じた教育活動により、自ら考え行動し、自分のなすべきことに粘り強く取り組む態度を育むとともに、異文化や歴史に関心を持ち、広く世界に目を向ける教育をめざしている。そして、ICTを活用した探究的な学習活動や大学等との連携を通して、高いレベルの論理的思考力を育むことにも力を入れている。

③　特色ある教育活動

特色ある教育活動としては、まず、体育祭があげられる。高校全日制と附属中学校の合同で、毎年5月に開催されるこの行事は、生徒会役員や応援団の生徒がリーダーシップを発揮し、生徒自ら作り上げる玉名高校の伝統行事である。マスコミにも取り上げられることの多い「人文字による応援合戦」は有名で、保護者のみならず地域の見学者も訪れ、多い時で6千人の観客の前で披露される。その他にも、9月に開催される文化祭は高校全日制、定時制および附属中学校の生徒、保護者会、同窓会の合同で2日間にわたり開催される。約3か月に及ぶ準備時間をともに過ごすことで「オール玉名」の連帯感を深める祭典となっている。また、職業観や勤労観を育み、将来の目標を明確化する機会とするため、国内外で活躍されている方々を招く「キャリア教育講演会」や、本校を卒業した現役大学生による講話「若駒キャリア塾」、大学の教授等による講義「一日若駒大学」、「熊大ワクワク連続講座」なども開催し、生徒の「夢の実現」に向けたサポートを行っている。

④　玉名高校体育祭

玉名高校の体育祭はよくマスコミに取り上げられる。体育祭終盤に行われる「人文字応援合戦」が有名だからだ。70年以上前から続くこの人文字は、各団（かつては4団であったが今は3団）約200名の生徒が階段状になった「やぐら」の上に整然と座り、夏の体育服（白）を基調に、腰に結びつけた男子の学生服（黒）、その内側に数枚のタオル（赤・黄・青など）をはさみ、応援団の演舞と太鼓のリズムに合わせて、学生服及びタオルを上げ下げすることで人文字を作り上げるのだ。各団、およそ100パターンの文字や図柄を、声を合わせ5分30秒という制限時間の中で表現する。スピードと正確さはもちろん、時代を反映した若者らしいメッセージ性の高さやオリジナリティを競い合う。この体育祭は、生徒会ももちろん体育祭全体の企画・運営を行うが、人文字応援合戦の主体は、青団、赤団、黄団の3つの団である。この各団の組織は、団の総合責任者である「総責」を筆頭に、応援責任者の「団長」、演舞の作成や練習計画の立案、人文字の指導などに当たる7人の「応援リーダー」、その他にスタッフ、団席ボード作成、創作ダンス責任者、競技責任者、会計責任者を3年生が中心になって担当し、2年生と1年生の団員を率いる。5月半ばの体育祭に向けて、前年度の年末から少しずつ組織を固め、準備を進めていき、新年度始業式の日に団編成表発表、続いて結団式、学校が始まって2週間目からはもう団席「やぐら」での練習が始まる。「やぐら」は4月最初の土日に業者がグラウンドに設置している。5月の連休をはさんで、約16日間、放課後1〜2時間を使って合計20時間の練習時間の中で人文字を完成させなければならない。生徒たちは心を一つにして、「応援の部・優勝」を目指していく。

⑤　特別活動としての玉名高校体育祭の意義

玉名高校の「創立 120 周年・第 76 回体育祭実施要項」によると、この体育祭の目的を「①体育祭の企画・運営及び参加を通して、自主性・創造性を養い、役割と責任を自覚させ、全員が一致協力する態度を育てる。②競技や練習を通して、気力・体力・競技力の向上を図るとともに、健康安全に留意する能力や態度を養う。」とある。体育祭であるから、どこの高校とも同じようにリレーや集団演技があり、所属感や連帯感が高まる行事であることは間違いないのであるが、この玉名高校の体育祭は伝統ある人文字応援合戦というものがあるため、より効果的に特別活動で目指している資質・能力を育成することができていると考える。

学校行事の目標は、学習指導要領第 5 章第 2 の 1「目標」で次のように示されている。「全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第 1 の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」

前述したように、特別活動の目標は「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育成することである。

この体育祭という学校行事を通して 3 年生は、自分たちで組織を作り体育祭で発表する演舞と人文字の内容を考えていくという「自主性」と「企画力」、話し合いを重ね、試行錯誤の末に原案が定まると、今度は団員の生徒たちに趣旨を説明し、演舞と人文字の連携を覚えさせるという「コミュニケーション力」と「指導力」を自然と身に付けていく。これらの力は社会に出た後にも必要となるもので、多くの卒業生が進学先の大学で、そして就職先でその力を発揮して活躍している。また、1 年生は高校入学後すぐに始まるこの応援練習で、自分が玉名高校の一員になったことを自覚し、集団の中における自らの役割を果たすことの重要性を学ぶ。経験者である 2 年生は、より高い完成度を目指し 1 年生をアドバイスするとともに、次の年は自分たちの学年が団を率いて行かなければならないことを意識する。

特別活動において重要視されている三つの視点「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」による資質・能力の育成が具現化されている活動の一つであると言えるのではないかと考える。伝統の学校行事が持つ教育的効果は計り知れないものがある。

⑥　時代の流れと応援団の変化

令和 5 年 5 月 13 日（土）、コロナで 3 年間中止や縮小になっていた体育祭が 4 年ぶりに通常開催された。青団団長は「団のみんなと一緒にゴールする。」「（団員には）成し遂げたという誇りを持ってほしい。」と述べた。「褒めて伸ばす」が団長の運営方針で、人文字の習熟が遅れている後輩たちに対しても個別指導を行うなど、対応も丁寧で優しい。個別指導を受けた 1 年生も「みんなのためにも頑張ります。」と言っていた（NHK「青春 100K」〈熊本・玉名高校タオル人文字応援〉令和 5 年 6 月 17 日放映の番

組中の発言)。

筆者（西澤）が初任で玉名高校に勤務していた昭和60年頃の応援団の態度は、大変横柄で威圧的であった。緊張感を持って完璧な人文字ができるよう、わずかなミスも許さないといった指導の在り方であった。結団式の時から会場の雰囲気はピリピリとしており、昼休みには「教室回り」と称して声出しの練習。放課後には、自宅で練習しているかの確認として「タオル狩り」(教室に残っている学ラン・タオルを取り上げ、次の日に指導する）を行っていた。この時期だけの儀式みたいなものと分かっていても、入学したばかりの1年生にとっては恐ろしかったろう。担任としては、応援団のやり方に驚きと疑問を抱いたが、クラスの生徒の精神的フォローをすることしかできなかった。教職員の間でも、応援団の指導の在り方については様々な意見が出ていた。「やり過ぎ」「軍隊のようである」という意見もあったが、「これが伝統で、この試練を乗り越えて本当の玉高生になれる」という肯定的な意見も残っていた。「パワハラ」という言葉も一般的ではなかった時代のことである。

平成18年からの二度目の勤務の時には、ずいぶんと応援団の在り方も変化していた。やはり、前近代的な高圧的な指導では色々と問題も出てきたようで、不登校傾向になる生徒が出だしたり、テレビの特番を見た視聴者から批判を浴びたりして徐々に改善されてきたようだ。学年主任として、各団の総責や団長に対しては団員あっての応援団であることや人をやる気にさせる指導の方法について考えさせてきた。生徒たちもよりよい体育祭になるよう、改革の精神を持って取り組んでくれた。その結果、応援団の団長やリーダーにも女子が入り、ミスをした団員に対してもみんなの前で立たせて叱責するのではなく、団席の後ろに連れていき、スタッフが優しく個人指導をするようになっていった。それでもまだ言葉遣いや態度には威圧的で乱暴なところが残っていて、応援団としても、それが伝統の継承と認識している部分もあった。

令和元年度に校長として三度目の玉名高校赴任をした筆者（西澤）は、体育祭実行委員会や職員会議を通して、体育祭の教育的意義について職員にも考えさせる機会を持った。少子化による高等学校の入学者減少が県全体の課題となる中、スクールポリシー、スクールアイデンティティの策定を進め、学校の魅力向上の一環としての体育祭と文化祭の活性化・レベルの向上を目標としたからだ。体育祭の人文字応援合戦は、「仲間と一つの目標に向かって協働する」最高の機会であり、体育祭の企画・運営及び参加を通して、「自主性・創造性」を養い、「役割と責任を自覚させ、全員が一致協力する態度」を育てることができると考えた。これは学習指導要領第5章第2の1で示されている特別活動「学校行事」の目標に掲げている資質・能力を高める機会になるものだと考える。

校長勤務3年のうち最後の2年間は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、通常通りの密集状態の人文字はできなかったが、3年生を中心にして、自分たちの代で伝統を途切れさせたくはないとの思いで、オンラインで演舞を発信したり、マスクをつけ、間隔をあけて座って声を上げずに人文字を作ったりして工夫をした。限られた条件の中で、生徒たちは高校時代の思い出を作ろうと一生懸命に取り組んでいた。

これもまた特別活動における「主体的・対話的で深い学び」の実現の一例であると考える。学習指導要領解説特別活動編第2章3でも重要視されているように、生徒たちは、「自分たちの実態や自己の現状に即して、課題を見いだしたり、解決方法を決めて実践したり」したのである。

⑦　生徒会活動と文化祭

玉名高校の生徒会活動は活発である。新入生歓迎会や文化祭などといった学校行事は言うまでもなく、今でもこんな生徒総会をやる学校があるのかと転入教職員が驚くほど、生徒会のそれぞれの委員会の活動内容が意欲的である。各学級の委員を集めて定期的に各種委員会が開かれ、年度目標に決めた取組の進捗状況を確認したり、現状に応じて修正したりしている。特徴ある取組としては、地域の小学生や中学生向け

に科学やスポーツの講座を企画したり、マラソン大会や祭りなどの自治体のイベントのスタッフになって企画運営にも携わったり、災害地支援のボランティアを企画したり、校内で「フェアトレード」や「核兵器廃絶」、「LGBT」などの研修会を、専門の講師を招くなどして開催し、生徒の問題意識を高めたりしている。社会に対して自分たち高校生（附属中と連携した企画も多い）ができることを探し、アクションを起こすというのが、玉名高校生徒会の伝統の精神である。

令和5年度の文化祭は9月15日（金）と16日（土）の2日間行われた。「第76回若駒祭実施要項」によると、目的は、「(1) 文化系部活動、各種委員会、各クラスなどにおける研究・学習内容及び成果を全校生徒、保護者、地域に向けて発表するとともに、協力の精神と自主的・実践的な態度を育て、玉高・玉高附属中生としての感性を養う。」「(2) これまでの伝統を受け継ぎながら、さらに特色ある玉高・玉高附属中文化の創造を目指し、実践した内容を検証し、成果を確認し合うことで、さらなる活動の活性化を図る。」とある。

生徒会文化委員長が実行委員長となって、生徒企画委員会を中心に企画を練り、職員実行委員会と協議を重ね、学校長の承認を得て運営していくという流れだが、ほぼ、生徒から上がってくる企画で事は進められる。文化祭、学園祭というと、「祭り」の要素が加わり、遊興的な出し物や展示が見られることも多々あるのだが、ここ玉名高校ではそれぞれが工夫された、意味のある取り組みがなされている。

生徒の自主的・自発的活動の場となっている背景には、教職員の適切な指導があってのことである。特に学級担任にとっては、この文化祭はホームルーム経営の場として最適であると認識しており、組織作りや話し合いの場、作業や発表の場において生徒一人一人が自己の居場所を確認しつつ、他者を理解し協働することで、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点からの成長を期待している。筆者（西澤）も担任をしている時は、ホームルームにて、まず「クラスで出し物（展示・発表）をやる意義とは何か？」という問いかけを生徒にしていた。「日頃の学校生活ではできないことができる。」「クラスのメンバーと仲良くなれる。」などの答えがよく返ってきていたが、日頃あまり話すことの無いクラスメートと話したりすることには多くの生徒が魅力を感じていたようだ。クラスの出し物として生徒に人気があるのは、食品バザー、映画撮影、劇、ダンス、縁日、お化け屋敷などだが、最近の生徒の映画撮影・編集技術の高さやダンスの技術の高さには驚かされる。劇にしてもそうだが、30年前に比べると監督にしても主役にしても、積極的に手を上げる生徒が増えてきた。バンドや歌合戦、ダンスでも自信を持って出演しており、周りもその技術を認め喝采している。単なる「お祭り騒ぎ」ではない、「自らのスキルの向上を自他ともに確認する場」となっている。積極的に自分や他人の個性を認め、伸ばし合うという意味でも、学習指導要領にある「生徒一人一人を尊重し、生徒が互いのよさや可能性を発揮し、生かし、伸ばし合う」集団活動になっていると言える。

こういった学校文化が生まれたのは、玉名高校が地域の伝統校という環境もあるのだろう。幾世代にもわたって、生き生きと学生生活を過ごす先輩の姿を見て、自分もああなりたいと願い、憧れの玉名高校生になった者も多いのではないだろうか。そして、自己肯定感とともに「愛校心」というものが芽生え、学校行事等にさらに積極的に参画していこうという意欲につながっているのではないだろうか。そういう風土がこの学校にあると思われる。

⑧　現生徒会生徒の意識

令和5年5月23日（火）、筆者2名（原北と西澤）で玉名高校を訪問した。生徒会の生徒と面談をして、生徒会活動について話を聞いた。その際、研究目的やヒアリングデータの取扱い等について説明し、研究協力について同意を得ている。以下は、その時の応答である。

Q1「なぜ、生徒会に入ったか」

A：入学前から体育祭や文化祭を見に行って、生徒会の人たちが活躍しているのを見てあこ

がれた。ここでは生徒主体の高校生活が送れると、魅力を感じた。

B：兄の勧めがあった。伝統を受け継ぐことに意義を感じた。

C：小学校の時から役員をしてきた。高校生になっても主体的に取り組む姿勢を持った生活ができ、自分が成長できると思って入った。

Q2「生徒会でのやりがいは何か」

A：自分たち主導で学校行事を考えることができる。「体育祭」や「文化祭」はもちろん、フェアトレードの取組や地域と連携したイベント開催などを自分たちが企画し運営できている。

B：「目安箱」を作り、生徒一人一人の意見を学校のいろんな改善に役立てている。校則の改定にも参加することができた。学校をいい方向に動かしているという実感があった。

C：ボランティアなどの社会貢献を、全体に呼びかけ、目的を共有し力を合わせて実施するという体験ができた。自分にもこういうことがやれるという自信につながった。

Q3「生徒会を運営していく中での悩みは何か」

A：生徒会の中で話を進めすぎたため、教師の理解を得ることに苦労したことがあった。

B：多くの人に仕事を分担して任せるということがなかなかできていない。

C：生徒会として学校行事を成功させることが一番大切だと考えている中で、他のイベントを同時に進めていくことが難しかった。

Q4「生徒会として地域の活性化にどう取り組んでいるか」

A：「いだてんマラソン大会」など、地元市町村と連携し、イベントを運営したりしている。

B：玉名高校の体育祭・文化祭が、地元住民を元気づけると考えている。多くの方たちにご来校いただき、本校生の活躍をこれからも見てほしい。

C：地域の経済とかを発展させる人材を玉高から出すためにも、様々な経験、例えばフェアトレードなど、社会問題を考えさせる活動を行っている。

Q5「伝統に対してはどう向き合っているか」

A：絶対視はしていない。変えるべきところは変えていく。体育祭の威圧的な指導については、リーダーたちと話し合いをしながら変えていった。

B：120年の思いが詰まっている「伝統」を大事にしたいという思いはある。時代の流れの中でも変わらず受け継いでいくものがあってもよい。

C：人によって、残すべきか廃すべきかの規準が違うだろうから、生徒会が両者の話し合いの場を作っていくというのが生徒会の役割ではないか。

生徒会の生徒の発言から窺えるのは、特別活動の目標との共通点であった。小学生の時から玉名高校の高校生の姿を見ており、その高校生が憧れの対象であったからこそ、自身が高校生になって生徒会に入れば成長できると思ったという発言は、自己のよさや可能性への気づきであり、人間としての在り方生き方（いわば自己実現）に通じる内容である。そのほか、生徒会を運営したり、イベントを企画した際、仕事内容の分担が上手くできず苦労した経験は、集団や社会の課題発見と解決（合意形成）に資する良い機会であったと思われる。このような苦労や困難に対して教師はいかなる支援が必要なのだろうか。教師による生徒会活動への関わり方については紙幅の関係もあり別稿に譲るが、生徒会活動が機能している背景には玉名高校による種々の活動が地域の小学校・中学校に開かれていることを挙げることができるだろう。高校の教育活動あるいは生徒会による諸活動が地域に開かれることで、小中学生の将来の自己実現の場として「玉名高校」が選ばれ、それが好循環となっていると推察される。

（西澤頼孝・原北祥悟）

4．特別活動の可能性と課題

繰り返すまでもなく特別活動は教育課程の一部を成す教育活動である。特別活動は各教科等で習得した知識・技能等を深めていくことに機能し、統合的で汎用的な力に変えることを通じて、実生活で活用できるようにしたり、学習意欲の向上を目指している。高校生はすでに小・

中学校での学びを蓄積していることから、小・中学生以上に集団に留まらず社会の課題にも目を向けやすくなり、実際に解決するための方法（話し合い活動や役割分担をすること等）を身に付けていると思われる。探究的な活動やキャリア教育との有機的な連関を図ることで、種々の課題解決能力の向上や人間としての在り方生き方を深く考える機会となるだろう。

そのためには、高校教員による自己・集団・社会課題への接続を意識した各教科の指導実践の蓄積が課題となる。今次学習指導要領の重要な概念として各教科に貫かれている「見方・考え方」を特別活動の目標と接続させることで、社会生活に生きて働く汎用的な力の育成が図られることを各高校教員が積極的に理解することがまずもって求められるだろう。玉名高校の事例から窺えるように、体育祭を通じた人間関係形成や社会参画といった資質・能力は玉名高校が持つ歴史や伝統に強く支えられていた。このような環境的な側面も重要な役割を担うが、やはり教職員一人一人が特別活動の意義を再確認し、各種教育活動に反映させていこうとする態度が高等学校における特別活動の充実には欠かせない。端的に指摘すれば、教科の専門家から教育の専門家への展開である。

（原北祥悟）

おわりに

特別活動の実践について玉名高校の体育祭を主たる事例としながら考察した。高校における特別活動の重要性は教科等と比べて相対的に劣位に置かれている。それは大学受験等の教育システム全体の問題ではあるが、だからといって特別活動を軽視して良いわけではないだろう。改めて述べるまでもなく、教育の目的は人格の完成にある。教科等の知識や技能とともに人格形成に欠かせない他者との協働や合意形成、人間関係形成、自己実現の経験は特別活動を核にして取り組む必要がある。

玉名高校の事例を検討すれば、実は高校においても人間関係形成等の資質能力を育む機会を十分に設けていることが確認できた。その一方で、特別活動の意義を教職員がどの程度自覚的に認識し、教育活動を展開しているのか検討することは今後の課題である。

さて、これからの高校教育の状況を俯瞰してみれば、その魅力化は最重要の課題であろう。人口減少に伴う地域消滅の危機を救う一つの方法として高校魅力化に白羽の矢が立っている。各高校が自分事としてわが校の子どもたちをどのように育てていくべきなのか議論するとき、地域課題の解決や地域社会を含めた人間関係形成、そして自己の在り方生き方に向き合うことができる特別活動という営みは重要な示唆を与えてくれるものなのかもしれない。

（原北祥悟）

参考文献

遠藤忠（2019）「高等学校・特別活動の可能性、問題、課題―個性的存在としての人間を育てる―」『日本特別活動学会紀要』第27号、pp. 1-6

九州大学大学院教育法制研究室（2018）『特別活動エッセンス―望ましい人間関係づくりのために―』花書院

熊谷圭二郎（2020）「高等学校の特別活動に関する研究動向」『千葉科学大学紀要』13号、pp. 103-110

熊本県立玉名高等学校（2023）「令和5年度（2023年度）学校経営案」

熊本県立玉名高等学校・熊本県立玉名高等学校附属中学校体育祭実行委員会（2023）「令和5年度創立120周年・第76回体育祭実施要項（案）」

熊本県立玉名高等学校・熊本県立玉名高等学校附属中学校若駒祭実行委員会（2023）「第76回若駒祭実施要項（案）」

広島県教育委員会HP「令和元年度　特別活動の取組事例（高等学校）」（https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/r1torikumikou.html　最終アクセス：2023年10月24日）